

学中から作歌を開始。その後、現・三重大学在学中に短歌会を結成。昭和二十年（一九四五）四月中部第三十六部隊（敦賀）に現役兵として入隊し、同年九月には復員。戦後は公立学校の教壇に立つ傍ら主に歌誌『創作』で活躍し、昭和四十一年には牧水賞を受賞。昭和四十七年創刊の歌誌『長流』の重鎮の一人として活躍。生涯に『断層』『夜思』『凌雨』『柊花』『蒼杉』の五歌集のほか歌論集『現代短歌私攷』を出版した。学校退職後は茂福の四高西隣に住み住居を「静虚草庵」と称した。

⑥ 中村徳之助「戦災受難の歌 三十八首」（「歌稿「戦災受難の歌」斎藤茂吉宛て書簡に同封、昭和二十年）

昭和二十年六月十八日午前一時三十分頃、敵機B29号三十機四日市市に  
来襲し、高所より焼夷弾・爆弾及び焼夷爆弾を投下し、市内は一瞬にして焦  
土と化す。我が家も敵弾の為め全焼し、多年買ひ集めたる歌集及び歌に關す  
る参考書、並びに家財・衣類ことごとく灰燼に帰せり。

松葉杖取出す暇もあらなくにただ身一つに吾はのがれし

妻に背負はれ燃ゆる町をばあとにして磧に急ぐころ細しも

今ごろは我が家も燃えて居りにけむとところに思ひ磧に退避す

鉄橋の下に身を伏せ敵弾を避け居る時に爆音きこゆ

年老いし父の身をしも気づかひて心暗くも退避すわれは

中風病みて歩みなづめる父なれば敵弾のため倒れぬまさむ

亡き乳母の導きにかも端なくも乳母の弟は救ひにぞ来し

亡き乳母の弟に自転車に乗せられて妻と公園さして急げり吾は

受難者の群に交りて吾はしもこころ小暗く時を經にけり

ともすれば父の安否を思ひつつわが心はも暗くなりゆく

配られし固パンもらひ罹災者と云ふみじめさをしみじみとおもふ

隣組の人等と共にしまし居りもらひしむすびを分けにつつ食む  
集りし罹災者の群を目がけつつ敵機来りて機銃掃射す  
再びし妻に背負はれ畦道を西へ西へと急ぎけるかん  
妻に背負はれ田中の径をいゆく時敵機再び現れにけり  
見も知らぬ人に自転車に乗せもらひしまし田中の径ゆきにけり  
乳母車に或は自転車に荷車に行きあふ人は乗せて呉れにし  
妻の村の青年に逢ひ自転車に乗せてもらひぬ妻の家まで  
罹災して人のころをしみじみと知りそめにけりはじめてわれは  
今までのあまき心を振り棄てて強く生きむと妻は語りぬ  
おもほえば涙湧き来も過ぎし日のころのままの生活あはれ  
父、公共待避壕にて敵弾の破片に頭を打たれ死す  
ちちのみの父の死体を探さんと遙に吾は来りけるかも  
疎開道路に逢ひし人より端なくも父が最期のさまをし聞きぬ  
公共待避壕で命果てつついまだなほ死骸分らぬ父よ悲しき  
三日経れど父の死骸は見当らず行衛尋ねどすべあらぬかも  
罪なくて家を焼かれちちのみの父をば敵に殺されにけり  
妻とわれ父が御骨を持ちつつ夕田の道を寂しく賑る  
人の世の幸楽しみし過ぎし日の果敢なき夢を思ひ居り吾は  
手作りの蚕豆あまた送り来し友が情は身にしみにけり（石井環君）  
詫び住まひころいぶせきこの頃は柿本人麿の歌に親しむ

負け戦身にしみじみと味ひぬ家をし焼かれ親を殺さる

愛国心無きにあらねど家焼かれ御尤（ごもつとも）とは思ほえなくに

筆に舌に敵撃滅の雄たけびを吾はもあげむ足萎ゆれども

ひと夜にし運命変りしわれ等なり寂しく生きんうつしこの世に

胸ぬちに怒り焰と燃ゆれども足萎え故にすべあらぬかも

戦はむ力さへなき足萎えしわが家を焼きぬ敵アメリカは

人の家の座敷を借りて住むは憂し夜遅く風呂に入りて寝るなり

気がねして人の家にし住むよりは不自由してもわが家に住みたし

**作者プロフィール 中村徳之助**(明治二十九年〈一八九六〉～昭和三十八年〈一九六三〉)歌人。現・蔵町の生まれ。三歳のときに罹った麻疹が内攻して肺炎、関節炎、化膿性骨髄炎を病み、五歳ころから足萎えの見に。大正二年（一九一三）四月から近所に新居を構えた三谷蘆華に師事し、歌誌『創作』に投稿。郷土文芸誌『かはたれ』『ヒヒラギ』『郷土芸術』『コスモス』などにも参加する一方、大正五年からは歌誌『アララギ』にも参加して、「三重アララギ会」発足に尽力。昭和八年に歌集『埋木』を出版し、昭和十年から「四日市歌の会」を結成。戦後の昭和二十一年夏には「三重アララギ歌会」を復活させ、最晩年は慈光院ホームで余生を送った。

⑦ 瀬田栄之助「祈りの季節」抄（『近畿春秋 創刊号』伊勢新聞社、昭和二十一年）

雅子の発狂

見当のつかぬ作業だけに、徹二はひどく疲れた。……鋤（すき）を持つ手が痺れるやうに痛む。焼跡から姉、和代の死体を掘り出さうといふのだ。焼棒杭と焼瓦の間隙から立ち登る煙に咽びながら、徹二の作業は正午近く迄続けられた。

六月の太陽は、流石に暑かった。彼は昨夜、空襲と同時に避難した儘のチバミシャツと半ズボンの恰好なのだが、それでも、ねつとりとした脂汗が軀にま